

## ① ディレクトフォース

今回、笹川平和財団・日本財団・ディレクトフォース主催、夏季プログラムに参加し、講演やグループセッションを通して、国際社会で通用するために何をしていけば良いのかを深く考える事ができた。

笹川平和財団理事長の田中伸男氏(前国際エネルギー機関(IEA)事務局長)による講演は「世界を視野に、自らを生かす。」というテーマのものだった。まず、IEA は 1973 年の第一次石油危機を機に、アメリカのキッシンジャー米国務長官によって安定したエネルギー需給構造を確立することを目的に設立されたそうだ。また、事務局長になるためには首相に推薦をしてもらい、世界での選挙に勝たなければならないと言う。事務局長の仕事はそれほど重要で大きな責任があるのだと実感した。田中氏は将来的な石油問題についての話もして下さった。2035 年には中東の石油の約 90% 近くがアジアへ輸出されること。ホルムズ海峡が閉鎖されてしまうと、日本に石油が入ってこなくなること。これらの話は私たちの将来に深刻な問題として関わってくるため、自分でしっかりと考え、向き合おうとする必要があるなどと思った。

グループセッションでは、6 名の講師の方々からたくさんの貴重な話を聞くことができた。その中で特に刺激を受けた、3 名の講師の方々の話を取り上げようと思う。

和田真さんとのセッションでは、留学に必要な条件や留学で苦労したことは何かという質問に答えて頂いた。和田さんが留学を考えたのは高校 3 年生のときで、ただ大学に進学するのではなく、+α で何かを学びたいと思ったのがきっかけだったそうだ。留学するためには強いチャレンジ精神と決意と勇気が必要とおっしゃっていた。私は、海外の文化や歴史に興味があり、留学のことにも興味があった。だから、実際に留学をしてきた方の話を聞くのはとても参考になり、留学について分からなかったことが少しずつ分かってきて面白く、もっと留学について調べてみようと思った。

横山隆広さんとのセッションでは、日本の学生とイランの学生の違いについての質問に答えて頂いた。全体的にイランの学生は自分の国にほこりを持っているように感じたとおっしゃっていた。それはイスラム教という深い教えを幼いころから身につけてきたからではないかと思った。現代の日本では強く信仰されている宗教はあまりないため、日本古来の文化は今の私たちの生活には海外ほど深く関わっていない。そのため日本の文化をほこりに思うということがイランなどに比べ、難しいのではないかと考えた。

山田正実さんとのセッションでは、アメリカ、イギリス、オランダでの滞在で感じた日本との違いは何かという質問に答えて頂いた。まず、日本は島国で琉球やアイヌなどの民族は純粋に保たれてきたため、言葉であえて伝えなくても表情や態度で相手と以心伝心ができる。それに対してアメリカ、イギリス、オランダはどういう訳か以心伝心ができない。だから、日本人が国際関係の仕事をするには、相手に伝えようとする力がとても必要で、伝えようとしない人材は全く必要とされないのだとおっしゃっていた。今までは外国語を話せるようにすることが国際関係の仕事をするうえで一番大切だと思っていたが、この話を聞いてから外国語をどんなにうまく話せても、相手に伝えられないのなら全く意味が無いと思った。自分の言葉で相手に伝える力は、これからの学校生活での意識次第で大きく養うことができると思う。だから、授業だけでなく友達との会話でも自分の意見をしっかりと伝えられるように心がけたい。

今回の基調講演やグループセッションを通して、自分が思っていた社会や世の中の大きさがどれだけちっぽけだったか、思い知らされた。日本の一部の小さな世界しか知らない自分達に講師の方々、地球という壮大な世界での視点を丁寧に教えて下さった。それでもまだ小さな一歩にすぎないと思う。だから、人に教えてもらうだけではなく、自分から積極的に世界を見て、社会に通用する人間になりたい。

## ② 企業大学訪問

今回私達のグループは、東京藝術大学音楽学部・器楽科・ピアノ、有森博准教授を訪問させて頂いた。

まず初めに、有森准教授がいらっしゃるまで、庶務係の方に美術学部の校舎を見学させて頂いた。もうすぐやってくる芸術祭にむけて、生徒はおみこしを作っていた。途中段階ではあったが、それでも技術がとても優れていることが伝わってきて、すごいなと思った。彫刻科の活動場所へ行き、木彫りと石彫りをしている様子を拝見させて頂いた。教室ということで案内された部屋は、もはや小さな工場のように驚いた。生徒は熱心に作品を制作しており、ここから職人が生まれていくのだと実感した。

見学を終え、いよいよ有森准教授とのインタビューが始まった。

卒業生でプロになれる方はどれくらいいるか、という質問ではプロというのは全て自称であり、曖昧である、とおっしゃっていた。そもそも藝大に入学する時点で、演奏のレベルはかなり高く、生徒達もプロ意識を持っていると言う。卒業後は大学院への進学か留学が多く、そこで技術に磨きをかけ、多くのコンクールに出場し経歴をつくっていくのだとか。そうして演奏会が開けるほどの一流のピアニストになっていくそうだ。自分はピアニストになるまでの経緯をよく知らなかったため、もっと軽く考えてしまっていたが、具体的な話を聞いて、自分が甘かったことを実感した。また、本気で一流のピアニストを目指すにはかなり大きな覚悟が必要なのだと痛感した。

音楽と向き合っていくには何が大切か、という質問では音楽が本気で好きかどうか全てである、とおっしゃっていた。この言葉を聞いて、私は感電でもしたかのようにビクッとしてしまった。それは、将来のことを考えている今、一番答えが見つからない質問だったからだ。ピアノの道に進むか、それとも他に自分の興味のある道に進むか。この迷いは、自分は本当に音楽が好きなのか、という簡単なこの問いかけの答えがどうしても分からないせいだ。かと言って、答えはすぐに出ない。だから今よりも、もう少しだけピアノと向き合っていく必要があり、正直な答えを見つけないと思った。

1つの曲を作り上げていく上で大切なことは何か、という質問では曲の出発点は楽譜であり、楽譜に基づいて演奏することが大切である、とおっしゃっていた。また、楽譜から何が生まれてくるかを想像し、世界を作り上げていくのだとか。そして、話の中で印象に残った言葉がある。

—あきない世界—

どんなに似ている曲であっても、その曲たちが持つ世界に同じものはなく、決してあきることはない、という意味ではないかと考えた。そんな世界を見るのが今まで自分は出来ていたのだろうか。ふと、思った。そもそも、そんな世界の存在に気づいていなかった気がする。だとしたら、これから自分がしていくべきことは何だろう。きっと自分は今まで1つの曲の世界を分かったつもりでいたがそれでは足りなかったと思う。それに、全ての曲が持つ無数の世界の違いを分かっていた。だからもっと楽譜を見て、そこに広がる世界を隅々まで観ることができるようになりたい。

インタビューも終わり、あいさつをしようとした時、庶務係の方のお願いのおかげで、今度私が出場するコンクールで弾く、ショパンの曲を有森准教授が弾いて下さった。まさか自分がコンクールで弾く曲を、生で弾いて頂けるとは思っていなかったのも、とても感動して涙が出そうになった。

私達を快く受け入れ、訪問させて頂いた東京藝術大学の方々に心から感謝したい。また、有森准教授の貴重な話を踏まえて、ピアノのこと、将来のことを深く考えていき、悔いの残らないような人生を送ってほしいように、自分で決めた道を努力して進んでいきたい。